

「一人の人によって命がもたらされた」

ローマ人への手紙 5章 12節～21節

説教 軽込 昇牧師

主イエス・キリストを救い主と信じる、キリスト教の信仰には、上級者、初心者の区別はありません。主イエス・キリストを信じる生き方に必要なもの、それは、主イエス・キリストへの信仰と神への祈りだけです。信仰は神の呼びかけに対する応答、祈りも神の呼びかけに対する応答です。神のほうから、わたしがあなたの相手であるとおっしゃってくださらない限り、わたしたちのほうからは神への祈りは出てきません。この祈りを聞いてくださる方がおられると知っているからこそ、わたしたちは祈れるのです。

わたしがそのサンプルです。子供の頃、頸椎カリエスという結核菌が骨に入って骨を腐らせる病気で小学2年生の冬から10年間、寝たきりでした。何人もの占い師や拝み屋さんが来て、般若心経やいろいろな呪文を教えてくださいましたが、相手が分からないのに祈ることはできませんでした。

幸いに、特効薬に手が届くようになり、カリエスは治り、二年遅れで中学三年生に編入してもらいました。念願の高校生になったのはうれしいのですが、そうするとあの病気の10年間はなんだったのだろうという疑いが芽生えてきました。高校一年生の秋、誘われて、初めて礼拝に出席しました。その日の説教はよく分かりませんでした。次の日曜日からはほぼ毎週通いました。

その教会の礼拝でわたしは本当の相手に出会ったのです。ここにわたしの責任を取ってくださるお方がおられる、その相手を発見したのです。わたしが発見した、というよりは、神がわたしを見出してくださったのです。次の年のイースター礼拝に、洗礼を受けました。それ以来、ぶつかって行く相手のいない世界に戻ろうとは思ったことは一度もありません。

神から、わたしがお前の相手だ、とおっしゃってくださることによって、わたしたちは初めて、真の相手に出会うのです。わたしたちが礼拝を守るということは、わたしたちは自分の都合でここにきているのではなく、神のほうからわたしたちに出会ってくださっているのです。

パウロがローマ人への手紙5章1～11節で力説していたのは、主イエス・キリストが人間の罪を贖い、赦し、義としておられる、ということです。大まかに説明しますと、パウロは3章

以下で、神が主イエス・キリストによってわたしたちを信じさせてくださるという筋道を明らかにしようとしています。主イエスをわたしたちにとっての唯一の救い主として信じる、というただそのことだけでわたしたちの罪を赦し、わたしたちが神を信じるができるようにしてくださったのだ、とパウロは説き進めてきます。

それは、主イエス・キリストが、わたしがお前の代わりに十字架にかかった、そのことによってあなたはもう神から捨てられることのない者になったのだ、安心して神を信じられる、あなたと神との関係はもはや揺らぐことがない、という意味が「神の義」という言葉には込められています。

12節「ひとりの人によって、罪がこの世にはいり、罪によって死がはいつてきたように、こうしてすべての人が罪を犯したので、死が全人類にはいり込んだのである」。しかし、その罪は既にキリストによって赦されています、だから信じられるはずなのですが、信じようとしなくて、何時までも不信仰の上に胡坐をかいているのがわたしたちです。

信仰者には上級者と初心者の区別はありません。その言葉と矛盾するようですが、わたしは、すべての信仰者がキリストによって生きる初心者でありつつ、キリストの恵みに生きる、という意味ではだれもがベテランに、つまり、ひたすらにキリストにつながるベテランになっていたきたい、と願っています。

祈りの言葉はたどたどしくても、どのように祈ったらよいかも分からなくても、神様、と祈り始めたのに、夜が白々とあける頃になっても、神様という言葉しか出てこなくても、うめいて祈ってくださる主イエス・キリストが共にいてくださることを信じて祈る、そのようなベテランの信仰者になって欲しいのです。

神様、信じたいのです。あなたに祈りたいのです、と神にむしゃぶりついて祈る、それがわたしたちの祈りであるからです。キリストの恵みの深さ、広さ、高さ、豊かさに心揺さぶられるベテランになりましょう。

(記 説教要約奉仕者)